

Zinko

verkita de David Van Reybrouck
eldonita de Internacia Esperanto-Instituto, 2017
56 paĝoj

かつて中立モレネ (Neŭtrala Moresnet) という地域が存在したことをご存じであろうか。ここはプロイセン (のちにドイツ) とオランダ (1830年以降はベルギー) の国境にあった、面積3.5km²、人口は多いときでも数千人ほどのごく狭い地域である。ただ、ここにはヨーロッパ最大の亜鉛鉱山があり、プロイセンとオランダ両国がその領有を主張して譲らなかったため、1816年のアーヘン協定により当面のあいだ共同統治することが決まり、1816年から1920年まで104年にわたって中立地帯として存続することになった。亜鉛鉱山がある以外は特記すべきこともない地域ながら、ヨーロッパの歴史、列強の間の対立紛争に翻弄されてきた地域である。

ここはエスペラントの歴史にもささやかながら足跡を残している。鉱山病院の医師でウィルヘルム・モリーという熱心なエスペランチストがいて、彼は1908年にエスペラントを公用語にして、「国名」を Amikejo にしようと提唱した。“O Tannenbaum” (もみの木) のメロディーに乗せた「国歌」も作られ、子どもから成人まで多くの人がエスペラントを熱心に学んだ。また、この年にドレスデンで開催された世界エスペラント大会では、中立モレネが世界のエスペラント・コミュニティの首都とならねばならないと宣言した。とはいえ、当時ここはドイツとベルギーにより共同統治されていた地域で、大幅な自治権が認められてはいたものの、国家として独立する可能性はなく、所詮はエピソードにとどまる。

著者は本書でモレネの変遷を、そこで生まれて数奇な運命をたどったエミール・リクセンという男性の生涯と重ね合わせて語る。彼の母親はマリー・リクセンというドイツ人の女性で、デュッセルドルフの工場経営者の屋敷で小間使いとして働いていたが、彼に妊娠させられ、モレネに逃れて1903年にエミールを出産した (それ以降、彼女がどういう人生を過ごしたのか、本書では全く語られない)。エミールは養子に出されて、neŭtralanoとして人生を歩み始める。

モレネは、第一次世界大戦後の1915年6月にドイツに占領され、ドイツ領となるが、終戦後の1920年にはベルギー領に編入されてケルミスと呼ばれるようになり、ここに104年にわたる中立地帯は消滅する。エミールはベルギー国民となり、ベルギー軍に徴兵されて1923年のフランスとベルギーによるドイツのルール占領に加わる。その後、第二次世界大戦中の1940年にドイツに



David Van Reybrouck

ZINKO

よって再占領されるや、今度はドイツ国籍となり国防軍に徴兵される。ドイツの敗戦後は、脱走してケルミス（1944年にベルギーへ復帰した）に戻るが、ドイツへの協力者としてレジスタンス組織に捕えられ、アメリカ軍に引き渡されて、シェルブールにあった収容所に収容される。まさに数奇としか言いようのない運命をたどり、著者は「彼は国境を越えたのではない。国境のほう
が彼を越えたのだ」と評している。

エミールは、戦前はパン職人として、復員後は羊毛工場の工員として働き、12人の子をもうけたが、晩年は体の自由も利かなくなつて、一日のほとんどを窓辺に座つて過ごし、1971年に68歳で亡くなった。晩年の彼の胸中に去来したものは何だったのだろうか。著者は彼を「現代のヨブ」と呼び、その苛烈な人生を彼の子どもたちや知人たちへのインタビューを通してえがき出していて感動を呼ぶ。

本書は片々たる小冊子ながら、その記述は個人史とモレネ（ケルミス）の歴史とが入り交じり、かなり錯綜していて、読みやすくはない。しかし、20世紀ヨーロッパの歴史を一庶民の人生を通してえがいた忘れがたいノンフィクションである（本書の裏表紙ではnoveloだとされているが、それは本書の高い文学性のためであろうか）。また、本書はオランダ語原典（2016年刊）からの翻訳で、私の読解力不足のためではあるが、Piet Buijnsters による訳文はかなり生硬な印象を受ける（それでも初版よりはだいぶ改善されたい）。発行部数も120部と極めて少なく、新刊なのに入手困難ながら、読むに値する本だと考え、あえて紹介させていただいた。なお、著者は1971年、ベルギー生まれの評論家で、著書の邦訳に『選挙制を疑う』（法政大学出版局、2019年）がある。

本書の表紙には美しい花の写真が掲載されている。これはzinkviolo (*Viola calaminaria*)といって、亜鉛（zinko）を含む土壌にしか自生しない、極めて珍しいスミレだそうである。春に咲くが、著者がケルミスを訪れたのは冬で初雪が降ったあとだったので、この花は咲いていなかったという一文で本書は結ばれている。心憎い結末である。

（La Movado 2019年12月号掲載）